

日本人大学生による「グローバル人材」に関する意識分析

An Analysis of “Global Human Resources” by Japanese University students’ Recognition

加藤 澄恵
Sumie Kato

1. はじめに

“グローバル人材育成”，“グローバル化する国際社会への対応力”，など新聞，メディア，インターネット，ラジオにおいて今日この言葉を聞かない日はないと言っても過言ではない。グローバル人材の育成が急速に求められるようになった背景には，三つの理由が考えられる。一つ目に「日本市場の縮小」，つまり日本企業は会社を維持し成長するためには，新たなマーケットを求め海外へ出て行かざるを得ない。二つ目に「情報格差がなくなったこと」。インターネットの普及により世界レベルで情報のボーダレス化が起き，ビジネスもボーダレス化している。三つ目に，「国と企業と人という，三位一体モデルの崩壊」すなわちこれまで日本では，国が成長すると企業も儲かり，そこで働いている人も潤うという三位一体の成功モデルが成り立っていた。しかしバブル崩壊後，長いデフレに苦しんだ結果，企業はリストラや賃下げなどをし，日本というブランドだけでは生活できなくなってきたからである（内田，2012，p.222）。2011年政府によるグローバル人材育成推進会議が設置された。“新興国の台頭はじめ変化の激しい国際社会の中で，活力の持続と豊かさを両立できる課題解決先進国として存在感のある国になるために必要な，グローバル人材育成の方向を示した。”（Diamond Online, 2013）

近年，日本の若者の「内向き志向」が問題視され，海外留学先で最も多い米国では，大学など高等教育機関で学ぶ日本人留学生が3万人を切った。13年前のピーク時に比べ4割も減っている。その背景に就職活動の問題などが挙げられるが，日本の若者が英語を学ぶことの意味を見いだせず，英語そのものに興味がなくなってしまっていると考えられる。昨今の日本企業の国際化，グローバル化に伴い，企業はどんどん海外に進出し，また，いくつかの日本企業は社内での公用語を英語にするという方針を発表した。英語能力においては，TOEICスコアを採用や昇進の条件とする企業が相次ぎ，学生が就職活動を有益に進めるためにも，TOEICの受験を促し，学生の英語学習にはますます圧力がかけられている。国際社会，グローバル社会は猛烈なスピードで進んでいる。こうした状況を踏まえ，政府は，「グローバル人材育成戦略」の審議をまとめ，文部科学省は，様々な施策分野や学校段階において，豊かな語学力・コミュニケーション能力のみならず，優れた国際感覚や異文化を理解する寛容な精神，新たな価値を生み出すことのできる想像力，国際社会で自らの考えを積極的に発信する力など，グローバル社会に対応した能力を持つ多様な人材

の育成に努めるよう促している。(英語教育 November 2012)

2. 本研究の目的

本研究では、学生によるグローバル意識の調査結果を総合的に分析し、グローバル化に向けた大学での外国語教育改革に役立つ具体的提案を行う。具体的には次の2点である。

- 1) 学生によるグローバル人材、英語学習に関する意識調査の報告と分析
- 2) 学生のグローバル化への意識因子にはどのようなものがあるのか分析を行う。

3. 調査協力者

調査協力者は日本人大学生（非英語専攻）1年生～4年生106名である。

4. データ収集

データ収集には、質問紙を使用した。質問紙は大学生のグローバル化の意識調査をした。大学生によるグローバル人材の意識調査の先行文献がないため、文部科学省のグローバル人材の定義（グローバル人材育成について、「グローバル人材育成推進会議中間まとめ」（2011年6月）グローバル人材育成推進会議3）を参考にし、各質問項目がグローバル人材育成の特徴となるかを留意しながら、16項目、5段階のリカートスケールを作成した。（詳細な質問項目は Appendix 1 を参照）。アンケートは無記名で、2013年7月に大学で実施した。クラス開始時にアンケートはコースの成績評価とは一切関係せず、研究目的のものであることを断った上で、回答用紙の記入方法を示し、質問用紙と回答用紙を配布した。授業で収集したアンケートによるデータは集計し、論文に使用することに同意を得た。

5. 分析の方法

分析は2種類行った。1つ目は、データの平均値と標準偏差を調査し、質問紙による項目ごとの度数と%による単純集計を行い、回答傾向の特徴を調査した。また、質問紙による質的観点からも調査を行った。2つ目は、得られた回答データに潜む学習者のグローバル時代への意識の傾向を探るために探索的因子分析を行った。因子の抽出には最尤法、因子軸の回転にはプロマックス法を用いた。最低因子負荷量は $|.40|$ を採用し、因子数の決定にはスクリーンプロットを用い、最大落差のあったところで因子数を定めた。

6. 結果と考察

6.1 質問紙による項目ごとの度数と%による単純集計では、Part Iでは、項目の高い順に質問2 高いコミュニケーション能力を持った人 (4.6)、質問3 積極性のある人 (4.4)、質問7 異文化に対する理解のある人 (4.2) であった。表1に示す。この研究におけるコミュニケーション能力は、質問項目1に高い語学力を持った人という項目があることか

ら、言語的コミュニケーション能力と切り離すこととし、コミュニケーション能力とは、「自分の情報を伝える能力」、「相手の情報を受け入れる能力」、「論理的に考え提案する能力」に大別する。(林・黒川, 2012)

これらの数値データを裏付けるのが、アンケートの自由記述欄に書かれた回答者の意見である。以下は回答者からのコメントである。

「高いコミュニケーション能力があればなんとかなる」

「コミュニケーションを楽しめる人」

「海外の人々と上手に付き合っていくために、思いやりや洞察力が必要だ」

Part I のグローバル時代に対応できる人材とは、高いコミュニケーション能力を持った人が最も高い数値であった。コミュニケーション能力がグローバル時代に対応できる最も必要な能力と考えるこれらの学生の意見は、平成24年度日本経済団体連合会の新卒者採用に関するアンケート調査集計結果からの結果である、「企業が採用で重視することは『コミュニケーション能力』(82.6%)が1位であった。」と言う調査結果と同様である。学生が考えるグローバル時代に対応できる最も必要な能力がコミュニケーション能力であり、その能力は企業が採用で重視する能力であり、コミュニケーション能力が育成される授業の構築を具体化できるよう工夫が必要である。私たちが、他者との関わりあいのある世の中を生活していくうえで、コミュニケーション能力を備えていることは、避けて通れない事実である。また、授業形態での期待では、インターネットのテクノロジーの発展により、教育または学習がオンライン化へ移行しつつある中、教師と学生、学生同士がコミュニケーションをとりながら進めていく授業には大いに価値があると考えられる。

質問項目7の異文化に対する理解のある人を支持している意見では以下の通りである。

「世の中の出来事を知ろうとする姿勢がある人」

「世界に踏み出したい気持ち、関心のある人」

世界の英語母語話者は4億人に対し、世界における英語使用人口は、5億人以上(文部科学省, 2013)とも言われており、グローバル化に対応できる人材の育成には、英米文化だけを異文化理解することではない。そこで参考になるのが、欧州評議会(加盟国は47か国、オブザーバー国は日本を含む5か国)が提示した、異文化理解について、「異文化能力(intercultural competence)という新しい概念である。異文化理解とは、「異文化への態度-好奇心と開かれた心、多文化への不信と自文化についての信頼をいったん保留すること」とまとめている(広田, 2013, pp.157)。英語教育において重要なことは、われわれ教師は、学習者に英語を学習することによって視野が広がると学生自身が理解できるような英語学習環境を整える必要があると考えられる。つまり、英語学習の中で、学習者が英語を学習することは自身への視野を広げる手段の一つと感じる授業の展開である。例えば、世界で起こっている様々な事件や動きを授業で取り上げ、学習者はそれを理解し、国際的視野を身につけたという自覚を体験することや、文化的背景の違う相手を理解し、コミュニケーションすることで喜びを感じるような授業を展開することは非常に重要ではないかと思われる。また、教師が授業で外国の文化、習慣に触れることも学習者の英語学

習の動機を高めるのに大いに期待されると考えられるであろう。

質問紙による自由欄のコメントの中で以下のような、「自分の意見がある人、発信できる人」という意見が目立った。

「自らの意見を発信できる人」

「自分というものを強く持っている人」

「色々な国、文化の人と交流するにあたって、その中で流されずに意見を発信できる人」

「多様な文化、価値観の中で何が正しいのかを考えられる人」

「日本人は、自分の意見を言わない、人に合わせる傾向があるとよく言われるので、少し我が強いくらいの人がグローバルな舞台ではちょうどいいと思う」

この意見は、日本人の性格などが関係していると思われる。国際競争社会でたくましく戦えるメンタリティーが、これからのグローバル時代に対応できる人材には必要であると学生は考える。「世界」で勝負するには、「自己主張ができる人間」が評価される（内田、2012）。小池（2010）にも同様の報告がある。ビジネスパーソンが取引をする上で、とかく積極的な外国人に先を越され、交渉時で引きをとり、マイナスの影響を被ぶることは、コミュニケーション能力への自信のなさからの表れと言う。その原因として英語の能力の低さに加えて、学校教育でコミュニケーションの技術を修練していない日本の教育政策の貧困さを挙げている。平成15年文部科学省は、「英語が使える日本人」の育成のための行動計画を打ちだし、コミュニケーション能力を身につける教育、例えば、スピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッションなどを授業に取り入れ、学習者の言語活動を中心とした授業へと改善が必要と指摘している（文部科学省 2011）。

多様な文化背景を持った他者とかかわる機会が多くなるこれからのグローバル時代に対応できる人材になるには、自らの考え・思想・意見を適切な言語を用いて表現し、それが正しく相手に伝わるようなコミュニケーション能力の育成が大切になる（増測、2010）。学生が積極的に参加し、他者の考えを受け入れ、自らの意見を発信し、協同で学ぶ喜びを育む授業形式が必要である。

質問紙による項目ごとの度数と％による単純集計の Pat II では、質問1スピーキングの学習を取り入れるべきだ（4.5）、質問4リスニングの授業を取り入れるべきだ（4.5）、質問5グループワークを取り入れるべきだ（4.2）、質問7プレゼンテーションの学習を取り入れるべきだ（4.2）であった。Part II の質問紙による自由欄のコメントでは、質問項目1、4を支持するコメントは以下の通りである。

「正しい文法に気を取られるあまり意見が言えなくなるので、スピーキングの練習は不可欠である」

「中学高校と文法のために勉強していたので、自分の意見が伝えられるようスピーキングの練習を取り入れるべきである」

「実際に伝えるスピーキングを重視すべきである」

「英語でコミュニケーションできることが大切であり、英語が読めてもコミュニケー

ションが取れなければ意味がない」
「学生の積極的な参加を求める授業」

小池（2010）の報告にも、ビジネスパーソンが国際ビジネスにおいて必要な能力について、「国際的な交渉力を備えたプレゼンテーション能力」が非常に必要、かなり必要と回答した割合は85.1%であった。

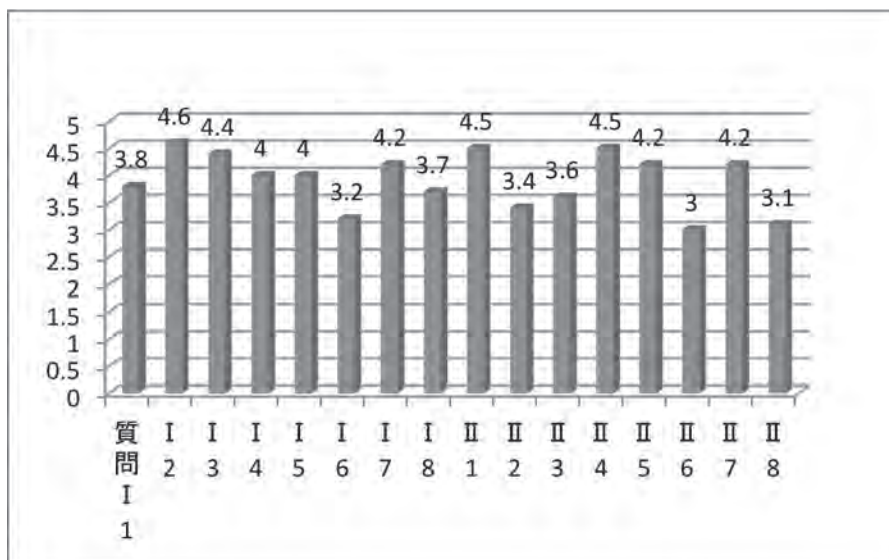
また、異文化、外国文化に対する知識を学ぶと言う Part 1 の質問項目 7 を支持するコメントも目立った。

項目の低い順では、パート I では、質問 6 責任感・使命感のある人 (3.2) 質問 8 日本人としてアイデンティティーのある人 (3.7) 質問 1 高い語学力を持った人 (3.8) で、パート II では、質問 6 文法の学習を取り入れるべきだ (3.0)、質問 8 英語の資格の学習を取り入れるべきだ (3.1)、質問 2 ライティングの学習を取り入れるべきだ (3.4) であった。図 1 に表す。

表 1. アンケート項目別集計結果 (N=106)

項目	M	(SD)
I グローバル時代に対応できる人とは？		
1. 高い語学力を持った人。	3.8	(1.06)
2. 高いコミュニケーション能力を持った人。	4.6	(0.88)
3. 積極性のある人。	4.4	(0.81)
4. チャレンジ精神を持った人。	4	(0.94)
5. 協調性・柔軟性のある人。	4	(0.87)
6. 責任感・使命感のある人。	3.2	(0.8)
7. 異文化に対する理解のある人。	4.2	(0.94)
8. 日本人としてアイデンティティーのある人。	3.7	(1.19)
II グローバル時代に対応できる人材の育成には、英語のクラスでは？		
1. スピーキングの学習を取り入れるべきだ。	4.5	(0.91)
2. ライティングの学習を取り入れるべきだ。	3.4	(1.10)
3. リーディングの学習を取り入れるべきだ。	3.6	(1.03)
4. リスニングの学習を取り入れるべきだ。	4.5	(0.84)
5. グループワークを取り入れるべきだ。	4.2	(1.02)
6. 文法の学習を取り入れるべきだ。	3	(1.06)
7. プレゼンテーションの学習を取り入れるべきだ。	4.2	(0.92)
8. 英語の資格 (TOEIC, TOEFL, 英検など) の学習を取り入れるべきだ。	3.1	(1.02)

図1 アンケート結果



6.2 因子分析の結果に見る学生のグローバル化に対する意識調査の傾向は、因子分析の結果、4つの因子が抽出されたが、4番目の因子は項目数が少ないため、除外した。第1因子は、高いコミュニケーション力を持った人やグループワークを取り入れるべき、スピーキングを取り入れるべきなど他人と関わる5項目から構成されており、「他者とのコミュニケーション能力」因子と命名した。第2因子は、チャレンジ精神、積極性など人の積極的な行動に関わる3項目から構成されており「行動力」因子と命名した。第3因子は、リーディング、ライティング、文法学習といった主に中学高校での学習に関わる3項目から構成されており、「中学高校英語学習能力」因子と命名した。表2に示す。各下位尺度における α 係数は、「他者とのコミュニケーション能力」が.84、「行動力」が.85、「中学高校英語学習能力」が.85であったため、尺度内の信頼性は十分であると判断した。

第1因子の「他者とのコミュニケーション力」は、 $M=4.32$ ($SD=.94$)、第2因子の「行動力」は、 $M=3.88$ ($SD=.85$)、第3因子の「中学高校英語学習能力」は、 $M=3.32$ ($SD=1.06$)であった。参加者が、グローバル化に対応できる人材とは、他者とのかかわりがあるコミュニケーション能力が最も重要と指摘していることがわかる。3因子の中で「中学高校英語学習能力」が一番低い。参加者は、今後グローバル化に対応できる人材になるには、中学、高校の英語教育は改善する必要があると考えていることがわかる。同様な指摘が小池にもある。(小池, 2010)。ビジネスパーソンも「実社会ですぐに対応できる英語教育を大学で行う」ことは非常に必要とかなり必要と回答した人は、71.7%であり、反対はわずか10%であった。また、「ディベートとスピーチの向上を目指し自分の主張を相手に説得できるような教育体制を整える」ことは、非常に必要、かなり必要合わせて82.9%と圧倒的であった。コミュニケーション能力の育成には、上記にも述べたとおり、授業形式の工夫がさらに求められる。コミュニケーション能力を育成する授業形態の一つに学習者中心

型の授業形態が挙げられる。学習者中心型の授業とは、学習者の学習意欲を高め、授業の活性化を高める授業であると言える。その理由として学習者中心型の授業では、学習者の自主的意欲を最優先する姿勢があるからである。教師が一方的に知識を与え、指示に従うだけの授業では受動的な態度が染み付き、学習者が本来持っているはずの“学びたい”と思うエネルギーを伏せてしまうことになるからである。

表2. 学生のグローバル化に対する意識の因子分析

項目	F1	F2	F3
Part II - 4 リスニングの学習を取り入れるべきだ。	1.01	-.17	.00
Part II - 1 スピーキングの学習を取り入れるべきだ。	.70	.10	.06
Part I - 2 高いコミュニケーション能力を持った人	.61	.21	.11
Part II - 5 グループワークを取り入れるべきだ	.52	.05	.00
Part I - 1 高い語学力を持った人	.48	.04	.12
Part I - 4 チャレンジ精神を持った人	.07	.84	-.15
Part I - 3 積極性のある人	.36	.67	-.03
Part I - 6 責任感・使命感のある人	-.23	.50	.23
Part II - 2 ライティングの学習を取り入れるべきだ	.03	.13	.80
Part II - 3 リーディングの学習を取り入れるべきだ	.24	.01	.67
Part II - 6 文法の学習を取り入れるべきだ	-.03	.01	.66

7. まとめ

本稿の目的は、学生によるグローバル人材、英語学習に関する意識調査分析をすることで、実態を把握し、大学での外国語教育の改革に役立てることである。以下に結論を列挙する。

1. 質問紙による項目ごとの度数と%による単純集計では、Part I では、項目の高い順に質問2 高いコミュニケーション能力を持った人 (4.6)、質問3 積極性のある人 (4.4)、質問7 異文化に対する理解のある人 (4.2) であった。
2. 質問紙による項目ごとの度数と%による単純集計の Part II では、質問1 スピーキングの学習を取り入れるべきだ (4.5)、質問4 リスニングの授業を取り入れるべきだ (4.5)、質問5 グループワークを取り入れるべきだ (4.2)、質問7 プレゼンテーションの学習を取り入れるべきだ (4.2) であった。
3. Part I の質問紙による自由欄のコメントでは、質問紙項目以外の意見で「自分の意見がある人、発信できる人」という意見が目立った。
4. 因子分析の結果に見る学生のグローバル化に対する意識調査の傾向は、因子分析の結果、3つの因子が抽出された。
5. 第1因子は「他者とのコミュニケーション力」因子、第2因子は「行動力」因子、第3因子は「中学高校英語学習能力」因子とそれぞれ命名した。

6. 全体の平均値が最も高かったのは、「他者とのコミュニケーション力」であり、一方最も平均値が低かったのは「中学高校英語学習能力」であった。
7. コミュニケーション能力を育成する授業では、ディベート、ディスカッション、プレゼンテーションなどを取り入れ、自分の意見を持ち、それを発信できる能力が身に付く授業形態の工夫が必要である。

以上のことから、学生の考える、世界で活躍するグローバル時代に対応できる人材は、コミュニケーション能力が最も必要という結果が明らかになった。それと同様に平成24年度日本経済団体連合会の新卒者採用に関するアンケート調査集計結果からも企業が採用で重視することは『コミュニケーション能力』(82.6%)が1位である。これは大学における外国語教育では、コミュニケーション能力を育成する授業のあり方も工夫が必要であるという主張を支持する結果と言えよう。外国語を学ぶことで異文化を理解し、国際競争社会でたくましく戦えるメンタリティー、自分の意見が言える人材の教育を行うことが大学での外国語教育の使命と考えられる。

引用文献

- 内田和成 (2012) ジャパニーズ・スピリッツの開国力：ダイヤモンド社
 小池生夫 (監修) 寺内一 (編集) (2010) 企業が求める英語力：朝日出版社
 鳥飼玖美子 (2011) 国際共通語としての英語：講談社現代新書
 林徳治・黒川マキ (2012) 「大学生のコミュニケーション能力の改善が主体性に及ぼす効果の実証研究 (2)」『年会論文集』第28号 242-243
 広田照幸他 (2013) グローバリゼーション、社会変動と大学：岩波書店
 増渕幸男 (2010) グローバル化時代の教育の選択：上智大学出版
 文部科学省大臣 官房国際課 (2012) グローバル人材育成への取組 『英語教育』11, 10-11.
 八島智子・久保田真弓 (2012) 異文化コミュニケーション論：松柏社
 Diamond Online (2013) 「グローバル人材育成に力を入れる大学」
 < <http://diamond.jp/articles/-/24090> > (2013年9月1日アクセス)
 グローバル人材育成について「グローバル人材育成推進会議中間まとめ」グローバル人材育成推進会議3 (2011年)
 < http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047siryo/_icsFiles/afieldfile/2012/02/14/1316067_01.pdf > (2013年9月10日アクセス)
 「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」について (2011) 文部科学省
 < http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/082/houkoku/1308375.htm > (2013年10月1日アクセス)
 「新卒採用 (2012年4月入社対象) に関するアンケート調査結果の概要」
 一般社団法人 日本経済団体連合会 (2012)
 < http://www.keidanren.or.jp/policy/2012/058_kekka.pdf > (2013年9月1日アクセス)

「世界の言語別使用人口」文部科学省（2005）
< http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryu/05120501/s003.pdf >（2013年9月1日アクセス）

Appendix 1

以下の基準で、該当する数字を○で囲んでください。

1	2	3	4	5
ちがう	ややちがう	どちらでもない	ややそのとおり	そのとおり

I グローバル時代に対応できる人とは？

1. 高い語学力を持った人。
2. 高いコミュニケーション能力を持った人。
3. 積極性のある人。
4. チャレンジ精神を持った人。
5. 協調性・柔軟性のある人。
6. 責任感・使命感のある人。
7. 異文化に対する理解のある人。
8. 日本人としてアイデンティティーのある人。
9. その他（自由回答欄）

II グローバル時代に対応できる人材の育成には、英語のクラスでは？

1. スピーキングの学習を取り入れるべきだ。
2. ライティングの学習を取り入れるべきだ。
3. リーディングの学習を取り入れるべきだ。
4. リスニングの学習を取り入れるべきだ。
5. グループワークを取り入れるべきだ。
6. 文法の学習を取り入れるべきだ。
7. プレゼンテーションの学習を取り入れるべきだ。
8. 英語の資格（TOEIC, TOEFL, 英検など）の学習を取り入れるべきだ。
9. その他（自由回答欄）

〔抄 録〕

昨今、グローバル人材の育成が急速に求められるようになり、大学ではコミュニケーション能力、異文化対応能力、高い語学力の育成に努めようとしている。本研究では、学生によるグローバル意識の調査結果を総合的に分析し、グローバル化に向けた大学での外国語教育改革に役立つ具体的提案を行った。具体的には次の2点である。1) 学生によるグローバル人材、英語学習に関する意識調査の報告と分析、2) 学生のグローバル化への意識因子にはどのようなものがあるのか分析を行った。その結果、質問紙による項目ごとの度数と%による単純集計では、Part Iでは、項目の高い順に質問2 高いコミュニケーション能力を持った人 (4.6)、質問3 積極性のある人 (4.4)、質問7 異文化に対する理解のある人 (4.2) であった。コミュニケーション能力を育成する授業では、ディベート、ディスカッション、プレゼンテーションなどを取り入れ、自分の意見を持ち、それを発信できる能力が身に付く授業形態の工夫が必要であると結論付けた。因子分析の結果に見る学生のグローバル化に対する意識調査の傾向は、因子分析の結果、3つの因子が抽出された。